

平成 22 年 5 月 25 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：平成 20 年度 ～ 平成 21 年度
 課題番号：20700484
 研究課題名 (和文) 英国大学剣道の普及・活動状況と修練における方法論的・文化論的研究
 研究課題名 (英文) Methodological and cultural study on the development of university kendo and training in the U.K.
 研究代表者
 本多 壮太郎 (HONDA SOTARO)
 福岡教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：10452707

研究成果の概要 (和文)：本研究では、英国の大学剣道クラブ及びクラブに所属する大学生剣士を対象とし、部員の特性や剣道開始理由、継続要因、継続上の問題点、指導者へのリクエストなどを、インタビューや質問紙調査、参与観察などの手法により明らかにした。また、これらの成果を基に、今後のさらなる大学剣道の発展のための指導資料として、クラブのイントロダクションコースで適用可能な学習モデルの開発を行った。

研究成果の概要 (英文)：This study focused on British university kendo clubs and students who are regular practitioners of university clubs. Research methods such as interviews, questionnaires and participative observation were employed to clarify various factors as to characteristics of the members, their reasons for starting kendo, why they decide to continue it, issues that concern them continuing it in future and request to their teachers. Based on these, a learning model for introduction courses in clubs was examined as a teaching material for further development of university kendo.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：剣道 国際化 英国大学生 普及 修練法

1. 研究開始当初の背景

(1) 海外における剣道の普及・活動状況に関しては、諸外国それぞれの実態・事情について、より深く、特定の年齢層や段位等に焦点を当て学術的に調査し、探究を試みた研究はほとんどなかった。

(2) 外国人剣士の剣道観に関する学術的研究については、質問紙による量的な調査は幾つか見られたが、インタビューなどにより対象者の内面に迫った質的研究法による報告はなかった。

(3) 外国人剣士を対象とした技術・稽古法に関する文献や資料においては、日本の文献の翻訳や、外国人剣士によって書かれた入門書が幾つか出版されていたが、それらは技術や試合審判規則、日本的武道論の紹介に留まっており、剣道開始時の年齢、稽古頻度、環境といった外国人剣士の特性や外国ならではの事情を考慮して書かれた稽古の方法論や方法に関するものはこれまで手がつけられていなかった。

2. 研究の目的

(1) 剣道の国際的普及・活動状況を国や地域全体の数値の推移からのみ捉えるのではなく、より深層的、現実的に普及・活動の実態、成果などを理解する。

(2) 研究者のこれまでの英国における剣道の普及・活動上に関する研究活動を継続・発展させ、大学剣道を対象に、大学剣道クラブの普及・活動状況などについて明らかにするとともに、英国大学生剣士の剣道観や修練上の課題・問題点などについても明らかにし、今後のさらなる剣道の国際化のための指導や支援に貢献する際に役立つ研究資料や教材を作成する。

3. 研究の方法

(1) 研究の対象

予備調査の時点では、英国剣道協会 (British Kendo Association) の協力により、英国全土で 12 の大学クラブの存在が確認され、本調査の時点では 1 つ新たに創設されており、計 13 のクラブが確認された。しかしながら、実際は全く活動が行われていないクラブについては調査対象から除外した。また、活動が確認されながらも、距離的な問題や日程の都合で訪問が不可能であった大学も幾つかあった。最終的には、エジンバラ大学、グラスゴー大学、ダラム大学、ノーサンブリア大学、ロンドン大学、インペリアル大学、ロンドン芸術大学、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、グロースターシャー大学といった 10 の大学クラブを訪問し、調査を実施することができ、これらのクラブを研究の対象とした。

(2) 調査の時期

2008年3月に渡英し、英国剣道協会への調査依頼の打ち合わせ、エジンバラ大学での予備調査を実施した。本調査は、2008年8月から2009年9月の間に3回に亘って渡英し、上記のクラブを訪問し、実施した。

(3) 調査方法

調査においては採用した方法は以下の通りである。

① 質問紙調査

大学剣道クラブに所属する部員の特性、剣道開始理由、過去の武術・武道経験、継続要因、稽古頻度、修練継続上の問題点、指導者へのリクエストなどについて理解するため、書き込み式の独自の質問紙を作成した。質問紙作成においては、研究者がまず日本語から英語に翻訳し、剣道有段者（三段）である英国人のチェックと修正を受けて完成させた。

② 部員へのインタビュー

部員の剣道観や修練上の課題・問題点を深層的、包括的、現実的に理解するため、質問紙に加えて、半構造的インタビューを実施した。

対象者は、2007年7月に英国の各大学剣道部責任者と英国剣道協会より推薦・選抜され、研究者が所属する福岡教育大学の剣道部との3週間の日英国際交流合宿に参加した英国男子学生剣士10名とした。

対象者の内訳は、ロンドン大学から3名、ポーツマス大学から2名、インペリアル大学、ケンブリッジ大学、グロースターシャー大学、サウスハンプトン大学、ケント大学から1名ずつであった。この内5名は大学入学と同時に剣道を開始しており、他の5名は大学入学以前に剣道を開始しており、開始以来継続者として剣道に取り組んでいる。また、それぞれの大学や協会から推薦・選抜されたことから分かるように、剣道に真剣に取り組んでいる修練者である。

尚、インタビューの際は対象者に、研究の背景や目的、主な質問項目などを記載し、それらを理解した上で研究に協力するという内諾書を提出してもらった。また、対象者が読み手に特定される、あるいは対象者を傷つけるような情報は一切公表しないこと、インタビューにより発見された真実のみを執筆することが、それぞれのインタビュー前に約束され、対象者には尊敬の念を持って接し、研究へ自らの意思とともに協力してもらえるよう配慮された。

③ 指導者・キャプテンへのインタビュー

クラブにおける運営、指導、修練上の事情や問題などについても、質問紙の分析結果や考察内容をより具体的、深層的にするため、各クラブの指導者及びキャプテンを対象に半構造的インタビューを実施した。各インタビューは、大学の道場やカフェなどでおよそ45分から60分の間で実施された。訪問調査後新たな質問を行う必要が生じた際は、メールのやり取りにより情報が補完された。

尚、各大学の指導者やキャプテンへのインタビューの際も、上記の部員へのインタビューの際と同じ研究倫理上の配慮がなされた。

④ 参与観察

各クラブの部員たちとともに稽古を行い、体験を通して様々な情報を直接的に収集するため参与観察法も採用された。各クラブに対して、わずか1~2回の訪問であったが、メンバーとして参加することにより、指導形態、指示内容、稽古内容、技術・技能レベル、部員の特性などの観察を実施した。本来、参与観察においては、長期間による調査を基に、観察結果の分析を繰り返し行い、仮説の構築—検証—修正、そして理論の設定といった分析的帰納法による手続きを取る。しかしながら、本研究においては、各クラブの調査期間が短く、それ故、観察ノートにまとめられた観察結果は、質問紙により収集したデータの解釈を進める上での資料として取り扱った。

⑤ ビデオ録画

訪問時の稽古は、各クラブ指導者・部員の許可を得て、何人かの部員の協力によりビデオカメラにより録画された。また、稽古前には、道場や防具の保管場所などの稽古環境に関する情報についても録画を通して収集された。これらのデータも参与観察と同じく質問紙によるデータの解釈を進める上での資料とした。

(4) 分析方法

質問紙調査においては、各質問項目を単純集計し、質問内容に応じて英国大学クラブ全体の傾向や、学生部員と学生外部員の比較、大学に入学してから剣道を開始した学生部員の傾向を上記に記述した視点から分析した。

インタビューにおいては、インタビュー内容の記述化、タグ化、プロパティ化、カテゴリー化といった段階的インタビュー分析法を採用し、上記に記述した視点をカテゴリーとして分析を進めた。

参与観察については、観察ノートを基に上記に喜寿知した視点から、英国大学クラブ全体の共通点、相違点、特異点を区別し分析を進めた。

ビデオ録画についても、映像記録を基に上記に記述した視点から参与観察と同様の方法で分析を行った。

各調査方法による分析結果は、「三角測量的手法（トライアングレーション）」に基づき、研究者や他の研究者による先行研究の結果も交えて複合的・総合的に解釈され、考察へとつなげた。

4. 研究成果

(1) 10 大学クラブ計 154 名の部員の内、大学生ではないが大学クラブに所属する学生外部員は 59 名 (38.31%) を数え、日本では見られない大学クラブの特徴が伺えた。大学

から剣道を開始した学生部員 80 名を対象とした質問では、開始理由について、半数から「何か新しいものをしたかった」「フィットネスの手段として」など、剣道に元々興味があり開始した訳ではないという結果が得られた。

入部後の継続理由については、「技術的・競技的特性に惹かれて」といった回答とともに、ここでも「フィットネスの手段として」「新しいことにチャレンジできるから」といった剣道を手段的に捉える回答が得られた。指導者への修練の取り組みに関するリクエストについては、「個人的な指導・アドバイスの機会を増やしてほしい」「指導者の数を増やしてほしい」といった指導をより受ける機会を求める意見が多数聞かれた。

英国において剣道は「新しいもの」であり、剣道への興味・関心が元々あり入部してくる数は多くはない。そのような状況においてより多くの開始者を求めるならば、剣道の持つ技術的特性や精神的特性だけではなく、フィットネスや人との時間的共有などの手段的利点についても幅広く紹介していく必要がある。手段的に剣道を捉える考え方は継続要因にも表れており、先行研究とは別に今回の調査で新たに得られた回答結果については今後さらに深層的に調査する必要がある。

指導者へのリクエストについては、回答結果及び他国でのクラブ離脱要因に関する研究結果からも、稽古において各部員とより深く接する機会を持ち、部員のレベルに適した説明や指導、フィードバックなどが求められるものである。一方、部員構成や指導者の数、時間などについて考えた場合、すべての部員に共通する指導やアドバイスをすることが困難であると同時に、ここの部員により緊密に接することもまた難しいものであると思われる。指導形態や稽古内容、資料の活用など改善策は幾つか考えられるが、その具体的方法については実践を通して検討されなければならない。

(2) 英国大学生剣士へのインタビューデータの一部は「剣道継続要因」というカテゴリーのもと、剣道継続要因に関して「英国での剣道へのかかわりを通して」「英国での剣道人間関係を通して」「日本での稽古・観察体験を通して」「日本での剣道人間関係を通して」といった4つのプロパティに分類された。

「英国での剣道へのかかわり」を通して、このプロパティの対象者が剣道を真剣に継続していく決心に至った要因には、英国内における修練の成果が形となって表れたことや、剣道を続ける上での目標が明確となったことが挙げられた。

「英国での剣道人間関係を通して」のプロパティでは、対象となった英国大学生剣士

は、英国内での指導者や先輩、仲間により剣道継続に関する影響を受けていた。指導者及び先輩に関しては対象者は、剣道への取り組みやその取り組み姿勢に裏付けられた技量や人間性に惹かれ、剣道への愛着心を高め、また、修練に対する刺激を受けていた。

「日本での稽古・観察体験」では、対象者は、高段者、同段位、同年代の日本人修練者との稽古や観察体験を通して継続への影響を受けていた。

「日本での剣道人間関係」を通して、このプロパティの対象者は、日本で出会った高段者、指導者、同年代の修練者と、稽古や観察を超えた触れ合いを通して剣道への取り組みへの刺激を受けていた。

対象者の剣道継続要因の中で、日本人修練者の稽古への取り組み、剣道の技量、対象者に接する態度は継続への重要な要因となっていた。故に、外国人修練者の剣道継続に関する日本人修練者のあるべき姿という点から考察すると、上記の分析結果は、日本人修練者が外国人剣士への剣道継続にいかにか大きな影響を与えるかということを示すものであるといえる。逆に考えると、日本人修練者の剣道への取り組み態度や外国人修練者へ接する態度いかんで彼らは剣道を真剣に継続するに至らない可能性もあるということである。

海外においては、指導派遣、海外勤務、留学、短期訪問などにより現地の人たちと剣を交え、指導したり、共に稽古したりする機会が長期、中期、短期にわたり様々な形である。昨今では、国内においても外国人修練者と接する機会がもはや珍しいものではない。いずれも形でのかわりであっても、自分の一つ一つの行動が外国人修練者の剣道継続に関係してくるかもしれないと自覚を持ち、彼らと交剣知愛を図ることが、今後のますますの剣道の国際的普及と発展に継続者の増加という点から貢献していくのではないかと考える。

(3) インタビューデータの一部はまた、対象者にとっての「剣道のあり方」というカテゴリーのもと、「剣道の独自性について」「修練について」「剣道のスタイルについて」「人間関係」「国際的普及・発展について」といった5つのプロパティに分類された。本研究の期間内には、「剣道の独自性について」と「修練について」の分析・考察を終えた。

対象者が構築してきた「剣道の独自性」に関する剣道観には、剣道は「自分自身を人として成長させてくれるもの」といった自己形成的な面と、「修練を通して新たな自分に気付かせてくれるもの」といった自己発見的な面、そして、「刀を観念的に取り扱い、日本で

生まれた武士道の考えを基盤とする他の競技はない日本独特の文化」といった観念的な面があった。また、これらの剣道観は、対象者のクラブの指導者や先輩との稽古や彼らの取り組み姿勢の観察、そして対象者が指導者より受けた指導を通して構築されていた。

「修練について」に関しては、指導者からの指導や、指導者、先輩、仲間との稽古、道場外での交流、そして先輩や仲間の取り組みの観察などを通じて「他の競技には見られない終わりなきもの」と「探究的であるもの」といった修練観を構築していた。

対象者の修練に関する剣道観が、言葉による説明や指導よりもむしろ、指導者や先輩との稽古の積み重ねを通じて築き上げられてきていたのは興味深い。今後は、具体的な稽古の例を数多く集め分析し、稽古のあり方について具体的提言を行っていくことが課題となる。

(4) 上記の調査を通して得られた今後のさらなる英国大学剣道の普及・発展に関する課題の内、剣道開始者をさらに増やし、また、開始者を継続者に導くための一案として、英国の幾つかのクラブにおいて導入されている初心者コースの全段階として位置付けられるイントダクションコース導入について検討した。

初心者コースは、剣道の経験がない人々のために、剣道の基礎的な内容を主としてある一定の期間あるいは回数のレッスンを提供するコースである。しかしながら、このコースの内容は果たして剣道の競技的本質を真に理解・体験することを提供しているかどうかといえば課題点を見受けられた。例えば、実際の導入されている初心者コース内容を検討してみると、それらは個人的技術の体験・習得が主な内容である。多くの場合は、基本的な足捌き、体捌き、竹刀操作に始まり、空間打突といわれる目の前に相手がいることを想定して行う打突稽古と続く。それが出来るようになるまでとボランティアの経験者を実際に打突することに取り組む。剣道技能の中核である対人的技能の体験・習得は動作パターンが約束され、直接的に打突せず寸止めする「木刀による剣道基本技稽古法」や「日本剣道形」といったような稽古の中で行われる。また、防具をつけて参加者同士あるいは経験者を相手に自由な打ち合いを行わせるクラブもあったが、それにはコースの僅かな時間が割かれるだけである。

剣道の競技的本質について考えてみると、それは他のスポーツにはない「剣道を剣道たらしめている剣道独自の特徴」とも言い換えるができる。それは武器（竹刀）を持ち向かい合った二人が有効打突を奪うために攻防を展開することである。経験のない初心者だ

からこそコースにおいて剣道の基礎・基本 t 系内容を提供することは当然のことであると思われる。しかしながら、剣道は多くの国の人たちにとってこれまで見たことのない「新しいもの」である。だからこそコース終了後、正式にクラブ加入し、剣道を継続するということが不確かな参加者には、その新しいものの本質あるいは醍醐味をある程度理解したり、体験したりする機会・内容を提供することもまた重要である。

この考えの具体策として提案したイントロダクションコースにおける「段階的戦術モデル」は、7回のレッスンを想定し、段階1「剣道の対人的特性について理解する」、段階2「戦術1: 竹刀を接触させて打突の機会を作る」、段階3「戦術1との関連で防御法について学ぶ」、段階4「戦術1との関連で引き技について学ぶ」、段階5「戦術2: 竹刀に接触させずに打突の機会を作る」、段階6「戦術3: 意図するところへ相手を打突させる」、段階7「究極の戦術についてのイメージを持つ」といった7つの学習段階に区別され構成された。それぞれの段階では、戦術学習により競技的側面の理解が図れるように、また、互角稽古や修正試合などにより学んだことを試し合う学習、剣道の礼節的側面を理解するための学習の場が設定された。

剣道を開始する人数は多いが、継続に至らず短期間の内にやめてしまう人数も多いことは、海外の多くの国の特徴の一つであると考えられ、この点からも構築したコースモデルは、英国大学剣道だけでなく、多くの国々の剣道開始者・継続者の増加に貢献できる資料となることが期待される。今後は、イントロダクションコースの次の段階としての初心者コースの内容とのつながりも含めて今回検討したモデルを実際に実践し、実践の中で具体的に修正・発展させていく必要がある。また、今回のモデルはクラブにおいて防具のレンタルができる場合のみを想定している。今後は防具のレンタルが提供できない場合の学習モデルについても検討・検証していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Sotaro Honda、A Study on the Development and Contributions that Kendo Coaching has made to the Internationalisation and Development of Kendo、Archives of Budo、Vol. 4、40-45、2008、査読有り
- ② Sotaro Honda、An examination of a tactical learning model in kendo for

introduction courses、Archives of Budo、Vol. 5、103-110、2009、査読有り

- ③ 本多壮太郎、英国大学剣士の剣道継続要因に関する研究、武道学研究、第42巻、11-24、2009、査読あり
- ④ 本多壮太郎、外国人剣士の剣道観に関する研究—英国大学生修練者の「剣道のあり方」に着目して—、福岡教育大学紀要、第58巻、69-79、2010、査読無し
- ⑤ 本多壮太郎、英国における大学剣道の特性と学生部員の取り組みに関する研究、福岡教育大学附属体育研究センター紀要、第34巻、13-25、2010、査読無し

[学会発表] (計5件)

- ① 本多壮太郎、外国人剣士の剣道観に関する研究—英国大学生剣士の剣道継続要因の分析を通して—、日本武道学会第41回大会、2008年8月30日、慶応義塾大学
- ② 本多壮太郎、剣道の国際的普及・発展に貢献する指導者育成と指導法のあり方と今後の課題—英国剣道協会と香港剣道連盟主催剣道コーチング資格認定コースを参考に—、日本体育学会第41回大会、2008年9月10日、早稲田大学
- ③ 本多壮太郎、英国大学剣道の普及・活動状況に関する研究、日本武道学会第42回大会、2009年8月25日、大阪大学
- ④ 本多壮太郎、戦術学習を基盤とした英国大学クラブにおけるイントロダクションコースの検討、日本体育学会第60回大会、2009年8月26日、広島大学
- ⑤ 本多壮太郎、外国人剣士の剣道観に関する研究—英国大学生剣士の「剣道のあり方」に着目して—、九州体育・スポーツ学会第58回大会、2009年9月6日、崇城大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本多 壮太郎 (HONDA SOTARO)
福岡教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10452707

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：